

六月例会発表要旨

特集

純文学ならざる〈小説〉たち

——中間・大衆・娯楽

【特集の趣旨】

運営委員会

本特集は、特に一九五〇～六〇年代に多くの読者を獲得した、「純文学」ならざる作品群に焦点を当てることで、従来の文学受容のあり方の再考を企図するものである。

純文学ならざる作品群とは、具体的には以下の二つの作品群を想定している。一つは、純文学作家が多数書き残している、純文学ではない傾向を持つ作品群である。一九五〇年代、純文学の創作と並行して、メディアの要請に応じた純文学ではない傾向の作品を、週刊誌や女性誌に発表する作家が登場する。こ

のような書き分けは、拡大する文学市場への対応として、三島由紀夫や川端康成など、多くの作家が行ったことでもあった。そこには、作家の純文学に対する意識という内面の問題と同時に、週刊誌や婦人雑誌への連載などのメディアの要請や読者の期待、映画化などの様々な外的要因があったことは疑い得ない。

もう一つは、もともと純文学を志向していた作家たちによって書かれた、剣豪小説や娯楽的な要素の強い小説群である。ここには、歴史的人物や社会的事件を題材とした大衆寄りの歴史小説も含まれる。例えば、松本清張の作品群が色濃く投影された時代性ゆえに話題を呼び、広範な読者を獲得しただけでなく、数々の映像化を繰り返していったことは周知のとおりである。

文学における芸術性と通俗・大衆性とをめぐる規範は、通俗小説が盛んに書かれた大正期から、さまざまに変容してきた。一九三五年の芥川賞・直木賞の創設は「純文学」・「大衆文学」を区画するためのものではなく、その境界で活躍する作家を生み、一九五〇年代には「純文学」と大衆文学の中間に位置する小説」としての「中間小説」が隆盛する。こうした境界上の葛藤によって、のちに司馬遼太郎作品などが受容される素地が形成されたといっても過言ではないだろう。

本特集が従来の研究や文学史では問題にされてこなかったこれらの純文学ならざる傾向を持つ作品群に注目するのは、文学における芸術性と通俗・大衆性とをめぐる規範の問題を改めて考える上でのより大きな批評的視座を獲得するためである。純文学ならざる作品群は、読者の歴史観や社会問題に対する認識に大きな影響を及ぼした一方で、それが同時に偏見や差別意識を読者にもたらすことにもなっただろう。こうした歴史的な観点から一九五〇～六〇年代の小説のあり方を考えることで、純文学ならざる作品群の持つ力を功罪併せて考えてみたい。

「文壇」の発掘と創成

山岸郁子

「純文学」をとりあえず私小説的なりアリズムを描いた作品とするならば、一九五〇～六〇年代に「純文学ならざる」小説が量産されるのは、文学や文学者が社会化し、週刊誌や中間小説誌といった新しいメディアが次々と登場したから、あるいは市場が拡大し商業出版ジャーナリズムが必要とする作品を作家が志向するようになったから、といえよう。

一九二二年に『新思潮』でデビューした川端康成は大戦後の好況の中、同人雑誌から「易々と文壇にでられ」（『文学的自叙伝』一九三四）たと自己認識し、戦後になると週刊誌や中間小説誌にも活動の場を広げていく。このようにためらいもなく時代の波にのる様子を大岡昇平（『常識的文学論』一九六一）のように、純文学からの「変質」と捉える者もいた。大岡はさらに「われわれの伝統や世界文学に関する知識に基づいた文学の理念をこわして、これを擁護しようとする批評家」

を問題だとし、そこで擁護されている井上靖や松本清張を「淫祠邪教」よばわりする。「文壇」の狭さと思想的欠如を問題としながらも、「変質」をとがめ、「伝統」に基づいた「文学理念」に固執するとはどういうことだろうか。

またこの頃平行して戦後まで生き延びた文壇作家が老大家となり、その青春や過去を静かに回想しながら文壇史の各コマを綴りはじめる。「文壇」とは不特定多数の読者が作品ばかりではなく、その外側にある写真や交友録、彙報欄などの情報から勝手に思い描くイメージであつたはずである。しかし歴史証人としての老大家がジャーナリズムやアカデミズムによって権威を纏い「文壇」を実体化させると、その構成員はそれと同期するかのようになり週刊誌や中間小説誌のグラビア頁に私的空間らしきものを公開する。ここで「純文学」概念に支えられていたはずの「文壇」は、それを守ろうとする作家やそこに商業的な価値を認める側によって確実に存在するものとなる。「純文学ならざる」小説の量産と「文壇」とはどのような関係にあるのだろうか。

本発表では『伊藤整日記』（平凡社）にも目を配りながら、歴史と理論のクロスポイント

トを絞り、回帰された「文壇」の中核にある「純文学」概念が包蔵しているものについて考えたい。

三島由紀夫の
エンターテインメント作品と
方法意識

——三島由紀夫「音楽」を視座として

山中剛史

三島由紀夫のエンターテインメント系列の作品が本格的に研究対象となってきたのは近年のことである。純文学的作品とほぼ同時進行的に書き継がれながら、発表媒体や読者層も異なる両者であれば、それらはまったくの別物として異なる方法意識で書き分けられていよう。しかしながら、両者に相補的または共振的な関係があるとすれば、「せいぜい手ぎわよく刻まれ、磨かれた無価値な石ぐらいのところ」（ジョン・ネイスン『三島由紀夫ある評伝』）といった位置付けは見直さなければならぬ。

「音楽」(昭三九・一)、「二」(婦人公論)は、精神分析医による「冷感症」に悩まされる女性の症例報告という体裁の小説である。先行研究では作者と精神分析との関係、高度成長期における性の抑圧といった問題等が指摘されてきたが、それらとは別に、「推理小説のごときサスペンス」(濫澤龍彦)から「スリリングなミステリー」(村田沙耶香)にいたるまで、推理小説(ミステリー)というジャンルにも比されてきた。深層心理という謎が、精神分析というツールによって徐々に解明され水解するという「音楽」の小説構造のことである。こうした推理小説的な方法意識は、

「音楽」の前年に執筆された戯曲「喜びの琴」にも見られるところであり、続く一九六〇年代後半における三島のエンターテインメント系列の作品、「複雑な彼」や「命売ります」といった作品にも影を落としている。

一方で、社会派推理小説で名を馳せた松本清張に対する否定的発言など、三島は推理小説を「文学」として認めないという立場を最晩年の「小説とは何か」まで一貫して公言している。その三島が「音楽」でミステリー的方法を用いたのは何故なのか。ジャンル意識

に起因するものなのか。「音楽」を視座として、改めて三島のエンターテインメントに対するジャンル意識と方法論について考え直してみたい。

忍法小説から歴史小説へ

——司馬遼太郎一九五〇—一九六〇年代の創作をめぐって

関 立 丹

ここ二十年、日本の歴史小説は中国で大量に翻訳され、司馬遼太郎(一九三三—一九九六)の歴史小説も数多く翻訳された。例えば、『項羽と劉邦』、『豊臣家の人々』、『義経』、『新選組血風録』、『韃靼疾風録』、『霸王の家』、『燃えよ剣』、『幕末』、『新史太閤記』、『国盗り物語』、『城塞』、『龍馬がゆく』、『功名が辻』、『風の門』、『馬上少年過ぐ』などである。また、その研究成果も蓄積されてきた。

司馬遼太郎の本当の意味での文学創作は、短編小説『ベルシアの幻術師』(一九五六、講談社倶楽部賞)から始まった。初期の創作

はまず忍法小説が知られている。一九五〇年代末の忍法ブームの中で、最も有名な作家は山田風太郎(一九三二—二〇〇一)であるが、忍法ブームを巻き起こしたのは司馬の『梟の城』(一九五八—一九五九、直木賞)、柴田錬三郎(一九一七—一九七八)の『赤い影法師』(一九六〇)、村山知義(一九〇一—一九七七)の『忍者』(一九六〇)などである。

司馬の忍法小説としては、『果心居士の幻術』(一九六一)や『風神の門』(一九六一—一九六二)も評価が高く、どちらも不思議な異色に満ちている。また、映画やテレビなどメディアの発達に伴い、『赤い影法師』(一九六二)、『忍者秘帖 梟の城』(一九六三)、『くノ一忍法』(一九六四、山田風太郎原作)が人気の映画となった。

忍法小説は題材は歴史であるが、ストーリーは奇想天外である。司馬は次第に歴史上の人物や事件を書くようになり、歴史そのままの傾向を強めていく。『龍馬がゆく』(一九六二—一九六六)、『坂の上の雲』(一九六八—一九七二)などがその代表例である。これらの歴史小説を通して、彼は日本人とは何かを見極めようとしたといわれる。また、『坂

の上の雲』はロシアや中国に関連しており、『朱盜』（一九六〇）、『故郷忘しがたく候』（一九六八）などは朝鮮人を題材にしている。

一九七〇年代以降、司馬遼太郎の歴史小説、紀行文、随筆は、日本と東アジア諸国との関連性に数多く言及し、その東アジア認識は日本の読者に大きな影響を与えた。彼の一九五〇―六〇年代の創作は、初期の創作であり、生涯の創作の基調を決めた時期でもある。よって、この時期の創作動機及び創作傾向を分析してみたい。

自然災害に被災された方々へ

日本近代文学会では、東日本大震災以来、少しでも被災された方々のお力になればと考え、会費の支払いに支障が生じた会員への会費の減免措置（二年間の会費免除）を実施してきました。

近年、各地で頻発している豪雨のほか、自然災害で被災されて会費の支払いに支障がある方は、お手数ですが、お茶の水芸術事業会まで、書面（メール可）でお知らせください。書式は自由です。なお、すでに納入された方や未納分がある方など、さまざまなケースが想定されますので、お問い合わせ下さい。お知らせのあった方々には、早急に会費減免の措置を行います。

被災されたみなさまの、一日も早いご回復を心より祈念申し上げます。

日 本 近 代 文 学 会